

「永遠のいのちに至る水」

- 1 さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、
- 2 洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである。
- 3 ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。
- 4 しかし、サマリアを通らねばならなかった。
- 5 それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。
- 6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。
- 7 サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。
- 8 弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。
- 9 すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。
- 10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」
- 11 女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」
- 12 あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」
- 13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。」
- 14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」
- 15 女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」
- 16 イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、
- 17 女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。」
- 18 あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」
- 19 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。」

20 わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」

21 イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。

22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。

23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」

25 女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」

26 イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

* * * * *

1) サマリアの女性との会話:「水を飲ませてください」

当時の社会ではユダヤ人とサマリア人の間には確執があり、お付き合いをしていませんでした。むしろ対立関係にありました。

しかも、宗教関係者の男性は道端で女性と話をすることもなかったと言われています。

そういう背景の中でイエス様はサマリアの女性に声をかけ「水を飲ませてください」とお願いしました。

これは女性にとっては驚きで、大いに戸惑っている様子が描かれています。

2) 「生きた水」

その女性が水を汲みに来たのはお昼頃、その時間はほとんど誰も水を汲みにはきません。

一般的には早朝か夕方水を

汲みにきたからです。つまり、この女性は誰にも会いたくない、人に出会うことで冷たい視線にさらされることへの

恐れをもっていたようです。

そういう意味では、彼女には心の平安が必要な女性でした。

イエス様はその会話の中でこう語りました。

13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。

14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。

わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

それはまさに彼女に必要なものであり、イエス様はずばりとその中核部分に触れたのです。

3)ものごとありのまま:

女性は驚きながらも、その水をくださいとイエス様に伝えました。

するとイエス様は「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と応えました。

おそらくこういう内容については、彼女は一番知られたくない、表に出したくない内容だったと思います。

自分の恥や辛さ、悲しさ、不幸の全てはその一連の出来事の中にあったからです。それが人々からの

冷たい視線、軽蔑的な取り扱いの原因だったと思われるのです。

彼女は、淡々と「わたしには夫はいません」とイエス様に伝えました。

それは彼女の答えられる全てだったと思います。

不思議なことにイエス様は、それを受け止めてくださいました。責め立てることをなさいませんでした。

こう書かれています。

イエスは言われた。

「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。

18 あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。

あなたは、ありのままを言ったわけだ。」

実は私たちは、さまざまな過去の傷や過去に受けた人からの嫌な仕打ちをよく覚えていて、感情はそこに縛り付けられたように、人のせいにしないと過去を語れない、とか、自分が今どう感じているか

と問われても「過去の傷」に縛られ、過去を引き合いに出さないと、今の自分が語れないほどになっていることが

あります。

私たちを本当に惨めな思いに縛り付け、絶望的な悲観主義の中に引き摺り込む力は「過去の自分や過去の人々を

裁かないではいけない」という思いです。過去の経緯のなかでの他人も自分も裁きながら今を生きようとしているのです。

この女性は「ありのまま」を伝えました。

実は

「今、ここ、価値判断を入れずにあるがままに、気づく」ことからの自分の出来事についての告白は、とても大切な作業です。

今を本当に解放されて生きたいと思ったら「過去についての裁きや評価をイエス様に預けて、淡々と、ありのままの

自分自身の気持ちや心を神様に伝える作業が大事です。

言い訳をせず、人のせいにもせず、自分が感じたそのまま、自分の行動そのままをありのまま、価値判断をつけずに
神様に伝えることが本当に大切なのです。
それができないと、心のスッキリ感はなかなかもたらされません。
彼女は自分の出来事を淡々とイエス様に伝えました。
イエス様はそれを受け止め、彼女の存在を否定せず、批判せず、裁くことも軽蔑することもせず
そのまま受け止めておられます。

過去を語る時、人についての愚痴や人をなんとかしてほしいという願望や自分は結局、変わらないので
失格者だと思いますとか、そういう価値判断や願望を述べるのが私たちの得意技なのですが
これでは、惨めになるか優越感を持つようになるかのどちらかです。
これでは本当の意味での解放はもたらされないのです。
他者への上から目線、自分への自己憐憫と卑屈な思いだけが優先しているから、本当の自分に気づいてないのです。
価値判断を下さないで、ありのままの自分を見つめて、告白すること。これは大事です。
自分だけの時間が必要であり、冷静に、怒っている自分や裁いている自分に気づく必要があります。
その気づきの中で、自分のそのままを神様に伝えるのです。あなた自身の心と存在そのものが処理されるためです。

4) 礼拝への招き

彼女は何かしらイエス様の対応に驚き、イエス様のことを預言者だと語り、話が礼拝について向かっていきます。
彼女自身も変化しているのです。
人は神様に触れ、心が軽くなると礼拝を捧げると喜びを感じられるようになってきます。
イエス様は彼女に、場所に関係なく、霊と真理都をもって礼拝すべきことを伝えました。
神殿に行くことも許されないであろう人も、どこからでも、神を礼拝できるというニュースは彼女を大いに喜ばせたと思います。
そして、彼女は自分で知っているキリストについての情報をイエス様に告げるのです。

5) キリストとの出会い

イエス様は、彼女に自分こそがその約束のメシア・キリストであることを明らかにしました。

彼女は水瓶をそこに置いて町に行き、この出会いについて語り、神の祝福を伝えました。
あれほど人と会うことを嫌っていた彼女が人々のところにキリストと出会った喜びと驚きを
伝えるために走って向かっている、これは奇跡です。
イエス様との出会いによって、生きた水が心の中に溢れ始めているのです。

* * * * *

MACF 礼拝映像は

<https://youtu.be/Anl6uKPYdAU>